

日常生活場面における認知的失敗傾向と記憶自己効力感の関係 —認知的失敗質問紙(CFQ)と成人用メタ記憶尺度(MIA)の因子間の相関分析—¹

清水 寛之 神戸学院大学心理学部

Relationship between tendencies of cognitive failures and memory self-efficacy in everyday situations: A correlational analysis of factors between the Cognitive Failures Questionnaire (CFQ) and the Metamemory in Adulthood (MIA) questionnaire

Hiroyuki Shimizu (*Department of Psychology, Kobe Gakuin University*)

The purpose of the present study was to elucidate the relationship between tendencies of cognitive failures and memory self-efficacy in everyday situations using the Cognitive Failures Questionnaire (CFQ) and the the Metamemory in Adulthood (MIA) questionnaire. Two hundred and fourteen undergraduate and graduate students (18-28 years old) participated in the study, and the two kinds of questionnaires were successively administered to each of the participants. The participants were asked to rate 25 items of the CFQ (5 factors) on 5-points scales, and 44 items of the MIA (5 factors) on 5-points scales. The main results showed that memory self-efficacy, as especially reflected on the factor of "Capacity" of MIA, was significantly related to the factors of "Failure of promise" and "Failure of name memory" of CFQ, and that the factors of "Change" and "Anxiety" of MIA were also significantly related to all factors of CFQ. These results were discussed in terms of the meaningful interpretations for the possibility of practical implications of the significant correlations between the specific factors in cognitive failure and memory self-efficacy.

Key words: metamemory, cognitive failure, memory self-efficacy, the Cognitive Failures Questionnaire (CFQ), the Metamemory in Adulthood (MIA) questionnaire

Kobe Gakuin University Journal of Psychology
2019, Vol.2, No.1, pp.21-29

私たちは日常生活のなかで、多かれ少なかれ誰しもが失敗や過ちをおかす。一口に失敗や過ちと言っても、さまざまなものが含まれる。行為者自身や関係者にとってどれほど深刻なものか、どの程度の物質的・金銭的損失や精神的苦痛を伴うものか、社会的な重要度や影響度はどれくらいか、行為者の反省や後悔のもとに同じような行為が繰り返されないのか、など多くの観点から個々の失敗・過ちを特徴づけることができる。法律上は一般に、注意義務に違反する状態や不注意、落ち度を過失と呼び、違法な結果を予見して回避できたにもかかわらず、注意

を怠り、回避のための行為を怠ったときに、他者に対して民事責任や刑事責任が発生する (e. g., 潮見, 1995)。

心理学的には、ヒューマンエラー研究において人間の失敗や過ちが何に対してどのような状況のもとで生じやすいのかに関心もたれる (芳賀, 2004; 一川, 2019; 井上, 2002; 海保, 1999; Reason, 1984, 1990)。また、客観的な失敗の事実とは別に、人が自らの失敗の傾向をどのように受けとめ、それらを個人特性の一部として自覚するかどうかによって、さまざまな思考形式や認識、見解、態度に影響が現れることが考えられる。たとえば、日常的に勘違いやうっかりミス、失念などを何度も経験すると、自己の認知や記憶に関する自己効力感 (self-efficacy) が

¹ 本研究は、JSPS 科研費 22530803, 25380992, 17K04510 の助成を受けたものである。

弱まるのが容易に推測される。ここでの自己効力感とは、自らが行為主体であると認識し、自己の行為を統制できるという信念をもち、外部からの要請に対応していると確信することに関連した概念である (Bandura, 1989, 1994, 1997)。とくに記憶に関する自己効力感とは記憶自己効力感 (memory self-efficacy) と呼ばれる。Beaudoin & Desrichard (2011) によれば、記憶自己効力感とは広範な内容を含む概念であり、自己のさまざまな記憶能力の評価に関する個人的な信念を含んでいる。言い換えれば、記憶自己効力感とは、さまざまな状況において個人がどの程度、自らの記憶能力を発揮できると思うかについての自己評価である。そのうえで、Beaudoin & Desrichard (2011) は、これまでに公刊された、あるいは未公刊の研究論文、合わせて 107 編を対象にメタ分析を行い、実際の記憶課題成績と記憶自己効力感との間の相関の平均は低いながらも有意であること ($r = .15$) を示した。

本研究は、日常生活場面での認知的失敗傾向に関する自己評価と記憶自己効力感との関係を明らかにすることを目的とする。日常生活場面での自己の記憶能力や記憶行動に関する認識は、メタ記憶質問紙 (metamemory questionnaire) によって検討することができる。メタ記憶質問紙は、個人のメタ記憶を評価するための自記式の質問紙の総称である。ここでのメタ記憶とは、特定の記憶課題において記憶方略を使用できることに気づくことや、記憶課題の学習困難度、記憶する個人の状態や能力、使用できる記憶方略の有効性などに関連した事柄についての幅広い知識が含まれており、自己の記憶行動に対してモニタリングを行ったり記憶成績を予測したりする能力や自己の記憶行動のプランニングやコントロール、調整、修正などにかかわる諸能力も含まれている。

メタ記憶質問紙のなかでも、認知的失敗傾向を測定する質問紙として、認知的失敗質問紙 (Cognitive Failures Questionnaire, CFQ) が知られている。CFQ は、Broadbent, Cooper, FitzGerald, & Parkes (1982) によって、日常場面での一般的な行動遂行にかかわる認知的失敗を調べるために開発された。認知的失敗に関連した出来事を表す記述文の一部 (全 25 項目、例えば、「本などをよく考えないで読み過ぎてしまったために、もう一度読み直さなければならないことが」) に対して、その相対的出現頻度を過去 6 か月の間で「まったくない」から「非常によくある」までの 5 段階で評定することが求められる。Broadbent et al. (1982) は、CFQ によって捉える日常場面での認知的失敗行動は下位カテゴリーを設けるのではなく、全 25 項目の得点合計が全体的な失敗のしやすさを表すとしている。山田 (1999) は、この CFQ に、より広範な失敗行動に関する項目を加えて調査を行ったところ、もとの CFQ の項目はほぼすべて一つの因子に関連していることを見いだした。

その後、清水・高橋・齊藤 (2006, 2007) は日本

版 CFQ (以下、単に CFQ という) を作成し、日本の多数の大学生を対象にこの質問紙データを収集した。その因子分析の結果では、CFQ が (a) 「空間的失敗」(場所や位置、方向性に関する認知的失敗行動に関連する)、(b) 「うっかり、ほんやりの失敗」(注意が散漫になる、当該の記憶課題から気がそれてしまうといった状態と関連する)、(c) 「検索失敗」(想起時の情報検索失敗に関連する)、(d) 「約束の失敗」(相手との約束や自らが決めた事柄の失念と関連する)、(e) 「人名記憶の失敗」(人名の記録や想起に関する失敗に関連する)、の五つの下位項目群からなることが示された (ただし、Wallace, Kass, & Stanny (2002) は「記憶」、「注意散漫」、「不手際」、「名前」という 4 因子を抽出している)。

他方、個人の記憶自己効力感については、メタ記憶質問紙の一種である成人メタ記憶尺度 (Metamemory in Adulthood questionnaire, MIA) を用いて評価することが可能である。この質問紙は、Dixon & Hulsch (1983) および Dixon, Hultsch, & Hertzog (1988) によって一般成人における自己の記憶機能に関する主観的評価 (感情面の評価を含む) と、記憶に関連する一般的知識の自己評価を多面的に探る目的で開発されたものである。自己あるいは一般人 (一般的な他者) における特定の記憶行動や記憶信念を表す記述文 (全 44 項目) に対して「まったくそのとおりだと思う」から「そうは思わない」の 5 段階で、あるいは、「まったくくしない」から「いつもする」までの 5 段階で、それぞれ適合度あるいは出現頻度を評定することが求められる。この質問紙は、もともとは 120 項目から構成されていたが、金城・井出・越智 (2013) が Dixon & Hultsch (1983) の研究結果を参考に、44 項目からなる日本版 MIA (短縮版) を開発した。この日本版 MIA (短縮版) (以下、単に MIA という) では、以下の六つの因子が抽出された。すなわち、(a) 「変化」(自己の記憶機能の変化の認識に関連する)、(b) 「課題」(記憶課題や記憶プロセスについての一般的な知識に関連する)、(c) 「能力」(自己の記憶能力の評価に関連する)、(d) 「不安」(記憶行動に伴う不安状態についての認識に関連する)、(e) 「方略」(記憶方略の利用頻度に関連する)、(f) 「支配」(自己の記憶力の支配感・コントロール感に関連する) である。このうち、とくに (c) 「能力」は記憶自己効力感を示す尺度であることが示唆されており (Hertzog, Dixon, & Hultsch, 1989)、実際にいくつかの研究で利用されている (Hertzog, Dixon, & Hultsch, 1990; Hertzog & Dixon, 1994)。Valentijn, Hill, Van Hooren, Bosma, Van Boxtel, Jolles, & Ponds (2006) はオランダ版 MIA (短縮版) の下位尺度のなかから、「変化」、「能力」、「不安」の 3 因子 (合わせて 34 項目) の評定値をもって記憶自己効力感の得点として研究に利用している。それら以外の「課題」、「方略」、「支配」の 3 因子についても、記憶自己効力感に関連しているように思われる。

本研究は、メタ記憶に関する総合的研究の一環として、メタ記憶質問紙の一種である認知的失敗質問紙と成人メタ記憶尺度とを同一の大学生に与えて回答を求め、その回答データをもとにそれぞれの質問紙を構成する因子間の相関関係を明らかにすることで、日常生活場面における認知的失敗傾向と記憶自己効力感との関係を検討する。

方 法

調査参加者

神戸学院大学に在籍する学部学生と大学院学生、合わせて214名が本調査に参加した。そのうち、男性が93名、女性が121名であった。調査参加者全体の年齢は、平均20.66歳(標準偏差1.40, 範囲18-28歳)であった。

調査期間

調査は、2012年3～8月と2015年5月～2016年2月の二つの時期に分けて行われた。

調査場所

調査は、認知心理学実験室(神戸学院大学有瀬キャンパス14号館5階)で行われた。

質問紙の構成

認知的失敗質問紙 日常生活場面における認知的失敗行動に関する個人の自己評価を調べるためのメタ記憶質問紙としてCFQが用いられた。日常場面での認知的失敗に関連した出来事を表す記述文の一部(全25項目)に対して、その出現頻度を過去6か月の間で「まったくない」、「めったにない」、「ときどきある」、「かなりよくある」、「非常によくある」の5段階で評定することが求められた。

成人メタ記憶尺度 日常生活場面における記憶自己効力感を測定するための質問紙としてMIAが用いられた。自己あるいは一般人(一般的な他者)における特定の記憶行動や記憶信念を表す記述文(全44項目)に対して「まったくそのとおりに思う」、「そうだと思う」、「どちらともいえない」、「そうは思わない」、「まったくそうは思わない」の5段階で、あるいは、「まったくしない」、「たまにする」、「ときどきする」、「よくする」、「いつもする」の5段階で、それぞれ適合度あるいは出現頻度を評定することが求められた。

調査手続き

質問紙調査は、メタ記憶に関する総合的な研究の一環として、他の実験や検査、別の調査とともに、同一の調査参加者に対して個別に行われた。どの調査参加者に対しても、最初にCFQが与えられたあ

と十分な休憩時間を置いてからMIAが与えられた。調査参加者がすべての調査に対して落ち着いて取り組めるように配慮がなされた。

調査参加者は、最初に全体的説明を受け、本研究への参加に関する同意書への署名が求められた。次に、調査が行われ、そのあとに参加協力への謝金の支払いに関する事務手続きが行われた。

分析方法

本研究における調査に関するすべてのデータは、表計算ソフトウェアMicrosoft Office Excel 2013によって集計・整理され、統計的分析は統計解析ソフトウェアIBM SPSS Statistics 25によって行われた。質問紙調査によって得られた回答に対して以下の得点化が行われた。

CFQについては、過去6か月の間で「まったくない」から「非常によくある」の5段階の評定反応に対して、順に0～4の点数が与えられて得点化された。CFQの得点が高いほど認知的失敗行動の出現頻度が高く、調査参加者は認知・記憶に関する失敗傾向や問題行動をより頻繁に確実に経験していると評価していることを示す。

MIAについては、「まったくそのとおりに思う」から「まったくそうは思わない」までの5段階の評定反応、あるいは「まったくしない」から「いつもする」までの5段階の評定反応に対して、順に1～5の得点を与えられた。逆転項目を反転させて整理すると、MIAの各因子において評定値が高いほど、それぞれ、「変化」では記憶機能が安定的である(記憶機能が減退しているという意識をもっていない)ことを、「課題」では人間の記憶に関するさまざまな知識(メタ認知的知識)が豊富であることを、「能力」では記憶能力が高いことを、「不安」では自己の記憶に関する不安傾向が強いことを、「方略」では記憶方略の利用頻度が高いことを、「支配」では自己の想起能力をうまくコントロールできていると評価していることを示す。

倫理的配慮

本研究は、筆者の所属する神戸学院大学の「ヒトを対象とする研究等倫理委員会」に対して事前審査を申請し、2010年12月と2013年7月に承認を受けた(承認番号HEB101207-2, HEB130619-1)。研究調査に先立って、すべての参加者に対して、研究参加に関するさまざまな権利を保障する文書を示し、そうした理解のうえで本研究への参加協力に同意する文書を研究者(筆者)との間で取り交わした。そのなかで、(1)実験等への参加は、個人の自由意思によるもので、参加しなくても不利益を受けないこと(授業科目の単位認定や成績評価とも関係しないこと)、(2)実験等の開始後も、いつでも自由に中断・辞退でき、その場合も不利益を受けないこと、(3)

実験等の途中または終了後に本実験に関して疑問が生じたときは、すぐに連絡し、適切な対応・措置が受けられること、(4) 本研究によって得られたデータは統計処理を加えたうえで学術雑誌などに公表されることがあるが、その場合も参加者の個人情報には厳格に保護され、個人を特定し得る情報は公表されないこと、が記載されていた。これらについて、研究者(筆者)と調査参加者の両者の署名入りの同一の同意書が2通作成され、双方が1通ずつ保管するという手続きがとられた。

結 果

認知的失敗質問紙 (CFQ) の結果

CFQ の 25 項目のそれぞれに対する全調査参加者の評定値について、平均と標準偏差を算出した結果を表 1 に示す。質問項目全体の評定値の平均は 1.89 (標

準偏差 1.14) であった。したがって、この質問紙に記載されている、日常生活場面での特定の認知的失敗については、平均して、ほぼ「過去 6 カ月の間で、ときどきある」といった程度の頻度で経験されていることが示された。質問項目によって平均評定値は、かなりばらつきが見られるものの、平均評定値が 3.00 を超える項目はなかった。すなわち、質問項目のなかに、平均して「過去 6 カ月の間で、かなりよくある」または「過去 6 カ月の間で、非常によくある」といった頻繁に経験される行動記述文は含まれていなかった。

清水他 (2006, 2007) は、山田 (1999) の研究結果を参考に、CFQ が次の 5 因子から構成されるという結果を示している。第 1 因子「空間的失敗」(項目番号 4, 12, 3, 18, 5 の 5 項目: 因子負荷量 0.35 以上の項目だけを因子負荷量の高いものから順に示す。以下同様)、第 2 因子「うっかり、ぼんやりの失敗」(項目番号 8, 21, 15, 19, 9, 14, 1, 10 の 8 項目)、第

表 1 認知的失敗質問紙 (CFQ) の質問項目と評定値

番号	質問項目	平均	標準偏差
1	本などをよく考えないで読み過ぎてしまったために、もう一度読み直さなければならぬ	2.20	0.96
2	家の中を歩いてきて、何をするためにそこに来たのか思い出せない	2.02	0.96
3	道路に出ている看板や標識に気がつかない	1.77	1.02
4	方向を説明するとき、右と左を間違える	1.23	1.13
5	人にぶつかる	1.21	0.99
6	出かける時、明かりや火を消したか、鍵をかけたかどうか思い出せない	1.93	1.00
7	人と会った時、その人の名前を聞きのがす	2.09	1.04
8	失礼なことを言ったかもしれないと、後になって気付く	2.46	1.01
9	何かをしている時に話しかけられると聞きのがす	2.65	0.93
10	かんしゃくを起こして後悔する	1.48	1.13
11	大事な手紙に何日も返事を書かない	1.53	1.11
12	よく知っていてもめったに通らない道に出るには、どこで曲がればいいのか思い出せない	1.64	1.16
13	スーパーマーケットに行くと、欲しい品物が目の前にあるのに見つけれられない	1.43	0.98
14	正しい意味で言葉を使っているかどうか、急に気になる	2.13	0.97
15	決心するまであれこれ迷う	2.78	1.09
16	約束を忘れる	1.17	0.85
17	新聞や本をどこに置いたか思い出せない	1.95	0.99
18	例えば捨てようと思っていた包み紙を残して、チョコレートの方をうっかり捨ててしまう	0.89	0.89
19	何かを聞いていなければならぬ時にぼんやり空想してしまう	2.62	0.98
20	人の名前を思い出せない	2.08	1.11
21	家の中で何かに取りかかっている時について他の事がしたくなってしまう	2.77	0.96
22	のどまで出かかっているのに、どうしても思い出せない	2.38	0.85
23	何を買いにその店まで来たかが、思い出せない	1.10	1.00
24	物を落とす	1.56	1.08
25	言おうとしていたことを思い出せない	2.30	0.84
	全 体	1.89	1.14

注) 評定反応から評定値への数値変換(得点化)は以下のとおりである。

- 過去6カ月の間で、まったくない=0
- 過去6カ月の間で、めったにない=1
- 過去6カ月の間で、ときどきある=2
- 過去6カ月の間で、かなりよくある=3
- 過去6カ月の間で、非常によくある=4

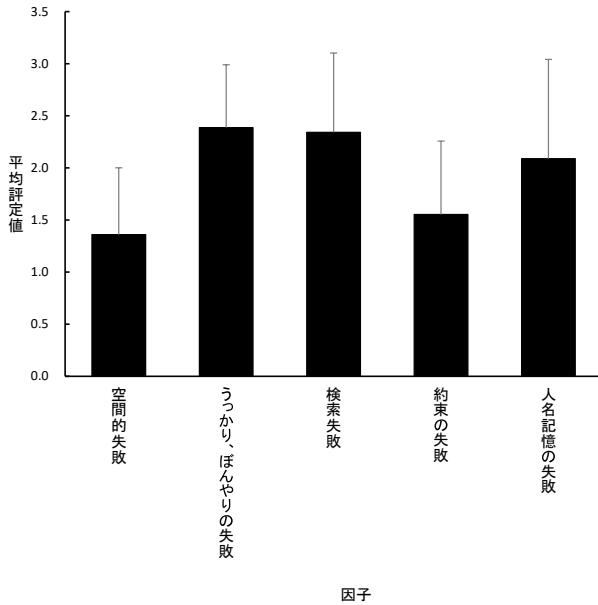


図1 認知的失敗質問紙 (CFQ) の因子別平均評定値 (エラーバーは1標準偏差を示す)

3 因子「検索失敗」(項目番号 22, 25 の 2 項目), 第 4 因子「約束の失敗」(項目番号 16, 17, 11 の 3 項目), 第 5 因子「人名記憶の失敗」(項目番号 7, 20 の 2 項目)。そこで, 清水他 (2006, 2007) の研究結果に基づいて, 調査参加者ごとに各因子別の評定値の平均と標準偏差を算出し, 図 1 に示す。試みに因子間の平均評定値を比べると, 全体として因子の主効果の有意性が認められた [$F(4, 852) = 140.64, p < .001, \eta^2 = .398$]。因子間での平均評定値の差を Bonferroni の多重比較によって検定したところ, 平均評定値は「うっかり, ぼんやりの失敗」と「検索失敗」がともに高く, それらに続いて「人名記憶の失敗」, 「約束の失敗」, 「空間的失敗」の順に低かった [いずれも $ps < .05$]。

成人メタ記憶尺度 (MIA) の結果

MIA の 44 項目のそれぞれに対する集計時 (逆転項目処理前) の全調査参加者の評定値について, 平均と標準偏差を算出した結果を表 2 に示す。すべての質問項目全体の評定値の平均は 2.59 (標準偏差 1.21) であった。金城他 (2013) は, Dixon & Hultsch (1983) の研究結果を参考に, MIA が次の 6 因子から構成されるという結果を示している。すなわち, 第 1 因子「変化」(項目番号 33, 3, 11, 9, 19, 17, 4 の 7 項目: 因子負荷量の絶対値 0.40 以上の項目だけを因子負荷量の高いものから順に示す。以下同様), 第 2 因子「課題」(項目番号 13, 14, 10, 15, 12, 34, 6, 5, 1, 27 の 10 項目), 第 3 因子「能力」(項目番号 44, 43, 35, 38, 32, 37, 40 の 7 項目), 第 4 因子「不安」(項目番号 7, 25, 2, 8, 16, 29, 39, 31 の 8 項目), 第 5 因子「方略」(項目番号 28, 20, 30, 18, 22, 23, 36 の 7 項目), 第 6 因子「支配」(項目番号 42, 24,

41, 21, 26 の 5 項目) である。

金城他 (2013) の研究結果に基づいて, 調査参加者ごとに各因子別の平均と標準偏差を算出し, 図 2 に示す (ただし, 因子負荷量が負の値を示す項目については得点化を反転させた)。試みに因子間の平均評定値を比べると, 全体として因子の主効果の有意性が認められた [$F(5, 1065) = 114.78, p < .001, \eta^2 = .350$]。因子間で平均評定値の差を Bonferroni の多重比較によって検定したところ, 「課題」が最も高く, それに次いで「不安」が高く, その次に「支配」が高く, 残りの「変化」と「能力」と「方略」の間には差がなかった [いずれも $ps < .05$]。

認知的失敗質問紙 (CFQ) と成人メタ記憶尺度 (MIA) における因子別項目評定値間の相関

CFQ の 5 因子と MIA の 6 因子における因子別平均評定値の間の相関係数を算出し, 表 3 に示す。この表のなかで, 相関係数は総じて低かったものの, 相関係数に有意性の認められた部分をまとめると, 次のようになる。すなわち, (a) MIA の「変化」は, CFQ のすべての因子との間でそれぞれ有意な負の相関が見られた。(b) MIA の「課題」は, CFQ の「人名記憶の失敗」との間でのみ有意な負の相関が見られた。(c) MIA の「能力」は CFQ の「約束の失敗」と「人名記憶の失敗」との間でそれぞれ有意な負の相関が見られた。(d) MIA の「不安」は CFQ のすべての因子との間でそれぞれ有意な正の相関が見られた。(e) MIA の「方略」は CFQ の「うっかり, ぼんやりの失敗」との間で有意な正の相関が見られた。(f) MIA の「支配」は CFQ のいずれの因子とも有意な相関は見られなかった。

考 察

本研究は, 大学生 214 名を対象に, 認知的失敗傾向の自己評価を測定する認知的失敗質問紙 (CFQ) と記憶自己効力感を測定する成人メタ記憶尺度 (MIA) を用いた質問紙調査を実施し, 回答データを収集した。それらの回答データをもとに, それぞれの質問紙を構成する因子間の平均評定値の相関関係について整理・分析を行った。

データ分析の結果, 主として, 日常生活場面における認知的失敗傾向の自己評価と記憶自己効力感との関係に関して, 得られた主要な知見は, 大きく次の 5 点にまとめることができる。

(1) MIA の「能力」は CFQ の「約束の失敗」と「人名記憶の失敗」との間でそれぞれ有意な負の相関が見られた。したがって, 自己の記憶能力に関する自己評価が高い者ほど約束事や予定の失敗が少なく, 人名の失念・想起困難を経験する頻度が少ないことが示された。

(2) CFQ のすべての因子は, MIA の「変化」との

表 2 成人メタ記憶尺度 (MIA) の質問項目と評定値 (逆転項目処理前)

番号	質問項目	平均	標準偏差
1 *	ほとんどのの人にとって興味がある事柄の方が、そうでない事柄よりも、思い出しやすい。	1.96	0.97
2 *	何かを思い出すように頼まれると不安になる。	2.28	1.10
3	以前のように、物事が思い出せない。	2.89	1.12
4 *	以前と同じように物事を思い出すことができる。	2.96	1.03
5 *	ほとんどのの人にとって、すぐに必要となる情報の方が、そうでない情報よりも、思い出しやすい。	2.11	1.00
6 *	ほとんどのの人にとって、行きたい所や行かなければならない場所への道順の方が、そうでない場所よりも、思い出しやすい。	1.97	0.97
7 *	記憶力が必要となる問題に取り組もうとするときは、不安になることが多い。	2.02	1.07
8 *	会ったばかりの人を誰かに紹介しなければならぬとしたら、落ち着かない気持ちになる。	2.23	1.26
9	10年前に比べると、本・映画・芝居などの題名を思い出せなくなった。	3.14	1.11
10 *	ほとんどのの人にとって、使おうとと思っている言葉の方が、決して使わないとわかっている言葉よりも、思い出しやすい。	1.96	0.98
11	若い頃に比べると、今はよく物を置き忘れるようになった。	3.11	1.12
12 *	ほとんどのの人にとって、特に好意を持っている人の方が、印象のうすい人よりも、思い出しやすい。	1.43	0.75
13 *	ほとんどのの人にとって、理解できる言葉の方が、自分にとって意味のない言葉よりも、思い出しやすい。	1.65	0.87
14 *	ほとんどのの人にとって、見たたり聞いたたりしたことのある言葉の方が、全く新しい言葉よりも、思い出しやすい。	1.72	0.85
15 *	あまり知らないことよりは、知っていることの方が思い出しやすい。	1.54	0.75
16 *	もし記憶を試すテストなどを受けなければならぬとしたら、いまにも落ち着かない気分になるだろう。	2.60	1.24
17	日付についての自分の記憶力は、ここ10年でとても悪くなった。	3.10	1.18
18	なかなか何かを思い出せないとき、思い出す手がかりとして何か似たようなことを思い出そうとすることがありますか。	3.04	1.22
19	名前についての記憶力は、ここ10年でとても悪くなった。	3.05	1.21
20	何かを思い出すために、その日の出来事をもう一度意識して思い浮かべようとしていますか。	3.08	1.13
21 *	自分の記憶力は、鍛(きた)えてさえいけば衰えない。	2.78	1.03
22	なるべくあとで思い出しやすいようにと、覚えておきたいことを何か他のことに関連づけて覚えようとしていますか。	2.61	1.09
23	覚えたい事柄には、意図的に神経を集中しようとすることがありますか。	3.68	1.04
24 *	自分次第で、記憶力の低下を防げる。	2.23	0.83
25 *	よく知らない人から何かを思い出すように頼まれると、緊張してしまう。	2.11	1.04
26	たとえ努力しても、自分の記憶力は低下していく。	2.86	1.02
27 *	ほとんどのの人にとって、具体的な物の方が、抽象的な物よりも、思い出しやすい。	2.15	0.93
28	覚える手助けとして、頭の中でイメージや光景を思い描きますか。	3.61	1.16
29 *	長い間していなかったことをしなければならぬときは不安になる。	1.80	0.68
30	何かを思い出そうとすると、それを繰り返し頭の中で思い浮かべることがありますか。	3.55	0.98
31 *	自分の記憶力が他の人たちほど良くないと感じるときは、緊張し不安になる。	2.10	1.09
32 *	本・映画・芝居などの題名を思い出すのは得意だ。	3.20	1.06
33	自分の記憶力は、ここ10年でとても悪くなった。	3.11	1.09
34 *	ほとんどのの人にとって、非常に興味のあるものの方が、そうでないものよりも、思い出しやすい。	1.56	0.67
35 *	歌の歌詞は、難なく思い出すことができる。	2.79	1.20
36	きちんと思い出すことができるように、メモをとりますか。	2.98	1.16
37 *	ヒット曲の名前などを思い出すのは得意だ。	3.16	1.15
38 *	本を読んだあとで、そこに書かれていた内容を思い出すのは簡単だ。	2.86	1.03
39	初めての場所へ行き、帰る道を思い出さなければならぬとしたら、不安になるだろう。	2.58	1.35
40 *	新聞記事やテレビ番組の内容を思い出すのは得意だ。	2.79	1.01
41	人がどれだけ一生懸命努力したとしても、記憶力がそんなに改善されることはない。	3.87	0.70
42 *	努力すれば、自分の記憶力を良くすることができる。	2.07	0.69
43 *	物語や小説のあらすじを思い出すのは簡単だ。	2.64	1.02
44 *	特定の事柄を、どこで読んだり聞いたりしたのか、たいてい正確に思い出すことができる。	3.20	1.06
	全 体	2.59	1.21

注) 評定反応から評定値への数値変換(得点化)は以下のとおりである。

適合度を問う質問項目(項目番号1~17, 19, 21, 24~27, 29, 31~35, 37~44):

まったくそのとおりだと思う=1

そうだと思う=2

どちらともいえない=3

そうは思わない=4

まったくそうは思わない=5

出現頻度を問う質問項目(項目番号18, 20, 22, 23, 28, 30, 36):

まったくしない=1

たまにする=2

ときどきする=3

よくする=4

いつもする=5

* 逆転項目

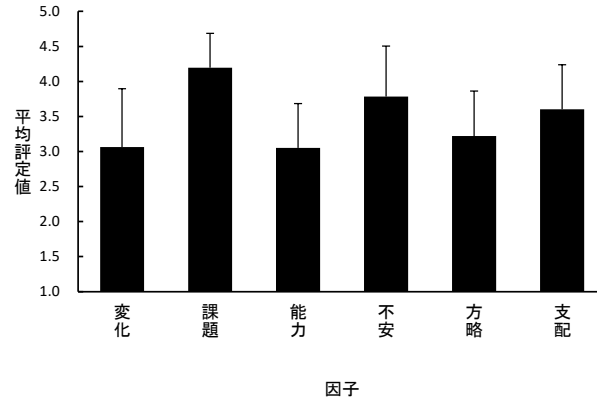


図2 成人メタ記憶尺度 (MIA) の因子別平均評定値
(エラーバーは1標準偏差を示す)

表3 認知的失敗質問紙 (CFQ) と成人メタ記憶尺度 (MIA) の各因子別評定値間の相関

CFQの因子	MIAの因子					
	変化	課題	能力	不安	方略	支配
空間的失敗	-.237**	.006	-.109	.359**	.065	.087
うっかり、ぼんやりの失敗	-.354**	-.003	-.092	.396**	.155*	.079
検索失敗	-.290**	.020	-.089	.286**	.091	-.020
約束の失敗	-.182**	-.051	-.154*	.176**	.071	.002
人名記憶の失敗	-.246**	-.165*	-.208**	.239**	.026	-.098

* $p < .05$, ** $p < .01$

間でいずれも有意な負の相関が見られたのに対して、MIAの「不安」との間でいずれも有意な正の相関が見られた。この結果から、日常生活での認知的失敗の種類に関係なく、失敗が頻繁に生起している者ほど、自己の記憶能力の変化(低下・減退)を自覚しており、不安も強いことがうかがわれる。

(3) MIAの「課題」は、CFQの「人名記憶の失敗」との間でのみ有意な負の相関が見られた。このことから、記憶課題に関する知識が比較的豊富である者ほど、人名記憶の想起困難を経験することが少ないことが示唆される。

(4) MIAの「方略」はCFQの「うっかり、ぼんやりの失敗」との間でのみ有意な正の相関が見られた。この結果から、不注意による失敗やうっかりミスが多い者ほど記憶方略の使用頻度が高いことが示唆された。

(5) MIAの「支配」はCFQのいずれの因子とも有意な相関は見られなかった。このことから、自己の想起活動をうまくコントロールできているかどうかの自己評価と認知的失敗傾向の自己評価とは関係しないことが示された。

以上の5点について、順に考察を進めていく。

上記(1)より、自己の記憶能力に関する自己評価が高い者ほど約束事や予定の失敗が少なく、人名の失念・想起困難を経験する頻度が少ないことが示された。前述のとおり、記憶自己効力感(MIAの「能力」)にもっとも強く反映されるとされている(Hertzog, Dixon, & Hulstsch, 1989)。清水他(2006, 2007)は、個人の客観的な記憶能力の優劣とは別に、日常生活

場面での記憶能力の自己評価は、大きく「回想記憶」「展望記憶」「人名記憶」という3種類に大きく分けて考えることができることを示している。すなわち、(a)特定の知識や過去の出来事を想起すべきときに適切に想起できるかどうか、(b)将来の約束事や予定をきちんと覚えていて遂行することができるかどうか、(c)人の名前を正しく想起できるかどうか、によって個人の記憶能力の自己評価を特徴づけることができる。本研究の結果から、そのうち「展望記憶」や「人名記憶」と記憶自己効力感が強く関係しており、「回想記憶」はさほどでもないことが示唆される。言い換えれば、特定の過去の出来事を想起できるかどうかは記憶自己効力感には直接結びついておらず、むしろ予定や約束に関する失敗を数多く経験したり、人の名前が比較的頻繁に想起できなかつたりすると記憶自己効力感が低くなると考えられる。その逆に、もともと記憶自己効力感の低い者ほど展望記憶や人名記憶に関する失敗経験に敏感で、場合によっては過剰に深刻に捉えている可能性も考えられる。

それらの原因の一つとして、展望記憶や人名記憶の失敗は、社会的な場面で他者に迷惑をかける、失礼にあたるといった事柄と結びついているのかもしれない。冒頭で述べたように、日常生活場面での失敗や過ちは、望ましくない結果を予見して回避しようとしたかどうかによって他者に対する責任が発生する。記憶自己効力感、そうした自己の記憶能力の低さが社会的・対人的な面での悪影響をもつことの懸念と関係していると考えられる。

上記(2)より、日常生活場面においてどのような

認知的失敗であれ、頻繁に失敗を経験している者ほど、記憶能力の低下や減退を自覚しており、自己の記憶能力に対する不安が高いことが示唆された。このことはまた、MIAの「能力」と同様に、同じく「変化」と「不安」が記憶自己効力感と関連しているという従来の指摘 (Valentijn et al., 2006) にもとづいて、認知的失敗と記憶自己効力感が関係していることの一つの証拠と言える。

これに関連して、清水 (2018) は、CFQとジンバルドー時間的展望尺度 (Zimbardo Time Perspective Inventory; ZTPI) を用いて、個人の認知的失敗傾向と時間的展望との関係を調べている。その結果では、ZTPIの「過去否定」(自己の一貫性における否定的な側面と関連する) という因子とCFQの「うっかり、ぼんやりの失敗」、「検索失敗」、「約束の失敗」との間に有意な正の相関が見られた。これに対して、ZTPIの「過去肯定」(自己の一貫性における肯定的な側面と関連する) は、CFQのすべての因子と相関が見られなかった。したがって、本研究において一般的に認知的失敗傾向が高いと自覚している者ほど自己の記憶能力の低下・減退を強く認識し、記憶や想起に自信をもてないでいることが示唆される。このことは、清水 (2018) の結果と一致していると考えられる。自己の記憶能力に関するポジティブな側面よりもネガティブな側面に関する認識が認知的失敗傾向の自己評価と結びついているという点が興味深い。

上記 (3) より、記憶課題に関する知識が比較的豊富である者ほど人名記憶の想起困難を経験することが少ないことが示された。MIAの「課題」に含まれる質問項目の多くは、一般にどのような状況が想起・検索に有利であるかの判断を問うものであり、その判断が客観的に正確であるほど、記憶課題に関する知識が豊富であると見なされた。したがって、ここでの記憶課題に関する知識の豊富さは、想起場面において人名などを効果的に検索するのに有利に働くような外的な手がかりを探索し、それを利用できるかどうかの能力と関係しているのかもしれない。

上記 (4) より、不注意による失敗やうっかりミスが多い者ほど記憶方略の使用頻度が高いことが示唆された。このことはおそらく、外部記憶補助の利用の問題と関係している。MIAの「方略」は外部記憶補助の利用 (メモや手帳などを使って想起に役立てること) はまったく含まれておらず、内的なりハーサルや内的手がかりの利用、外部記憶補助に頼らない想起・検索の遂行に焦点を当てている。したがって、不注意による失敗やうっかりミスが多い人たちは、ふだん外部記憶補助にあまり頼らずに、そうした内的方略に多く依存している可能性がある。そのため、日常生活場面で、忘れそうな事柄をメモや手帳に書き留めたり、携帯電話を備忘録のように利用することが少なく、記憶に関する失敗を比較的頻

繁に経験することにつながっているのではないかと考えられる。

上記 (5) より、自己の想起活動をうまくコントロールできているかどうかの自己評価と認知的失敗傾向の自己評価とは関係しないことが示された。これについては、自らの認知的失敗の原因や理由を何に見いだそうとするかという原因帰属に関する個人差の問題と深く関わっている。たとえば、教授学習心理学の分野では行為の成功・失敗が後の行動の動機づけにどのようにかかわっているかについて、Weiner (1979) による原因帰属理論がよく知られている。それによれば、(a) コントロールの所在、(b) コントロール可能性、(c) 安定性、という三つの次元の組み合わせによって、行為の結果の捉え方に関する個人スタイルを分けて考えることができる。コントロールの所在の次元では、個人の自尊感情に関係し、自己の能力の低さに原因を求めるのか (内的)、与えられた課題が困難すぎることに原因を求めるのか (外的) に分かれる。コントロール可能性の次元では、自分の努力や工夫でなし遂げることができると考えるのか (コントロール可能)、自分ではどうにもならないと考えるのか (コントロール不可能) に分かれる。安定性の次元では、次の課題への予測に関係しており、引き続いて同じ原因が影響すると考えるのか (安定)、たまたま偶然に当該の結果が得られたと考えるのか (不安定) に分かれる。こうした原因帰属のスタイルは、学習者の年齢や置かれた状況が影響することは言うまでもないが、本研究の結果は認知的失敗傾向がコントロール可能性の次元には関連しないものの、コントロールの所在と安定性の各次元には関連する可能性が考えられる。つまり、認知的失敗の経験は、内的で安定した原因に帰属されにくく、外的で不安定な原因に帰属されがちであっても、想起の成否が個人の努力によって決まるとは捉えにくいかもしれない。

以上のように、個人の認知的失敗傾向と記憶自己効力感とは関係していることが明らかになった。MIAの「能力」、「変化」、「不安」という3因子とCFQのいくつかの因子との間に有意な相関が見られたことから、認知的失敗経験 (とくに展望記憶や人名記憶に関連した) が記憶自己効力感と関係していることが示された。今後の課題として、日常生活場面における認知的失敗のなかでも、他者との関係や社会的な文脈との結びつきが強い失敗経験 (約束や予定、人名の失念など) と、あくまで本人だけが損失を負うような失敗とを分けて、記憶自己効力感との関連を詳細に検討することが考えられる。

さらに、記憶や想起の場面で自己の記憶能力に関する自己評価だけでなく、その場面をどのように捉えるかという状況に関する評価や認知を広く検討する必要がある。記憶や想起に関する状況の認知・評価しだいで、課題の成否の意味が大きく変わってく

るからである。Beaudoin & Desrichard (2011) によれば、漠然とした自己の記憶能力の自己評価と全般的な記憶課題成績との間の関連性よりも、目の前の具体的な記憶課題に対する記憶自己効力感とその課題成績との間の関連性のほうが強い。本研究の結果からおそらく、記憶課題の性質が周囲の人たちにどの程度かかわっているのか、あるいは潜在的にどのような社会的影響力をもつものなのかによって記憶自己効力感が異なる可能性が考えられる。したがって、記憶自己効力感に関連して、記憶能力に関する自己評価だけでなく、記憶に関する状況認知についても検討する必要があるだろう。

引用文献

- Bandura, A. (1989). Regulation of cognitive processes through perceived self-efficacy. *Developmental Psychology, 25*, 729-735.
- Bandura, A. (1994). Self-efficacy. In V. S. Ramachandran (Ed.), *Encyclopedia of Human Behavior* (Vol. 4, pp. 71-81). New York: Academic Press.
- Bandura, A. (1997). *Self-efficacy: The exercise of control*. New York: Freeman.
- Beaudoin, M., & Desrichard, O. (2011). Are memory self-efficacy and memory performance related? A meta-analysis. *Psychological Bulletin, 137*, 211-241.
- Broadbent, D. E., Cooper, P. F., FitzGerald, P., & Parkes, K. R. (1982). The Cognitive Failures Questionnaire (CFQ) and its correlates. *British Journal of Clinical Psychology, 21*, 1-16.
- Dixon, R. A., & Hultsch, D. F. (1983). Structure and development of the Metamemory in Adulthood scale. *Journal of Gerontology, 38*, 682-688.
- Dixon, R. A., Hertzog, C., & Hultsch, D. F. (1986). The Metamemory in Adulthood (MIA) questionnaire. *Psychopharmacology Bulletin, 24*, 671-688.
- 芳賀 繁 (2004). 失敗の心理学－ミスをしないう人間はいない 日本経済新聞社
- Hertzog, C., & Dixon, R. A. (1994). Metacognitive development in adulthood and old age. In J. Metcalfe & A. P. Shimamura (Eds.), *Metacognition: Knowing about knowing* (pp. 227-251). Cambridge University Press.
- Hertzog, C., Dixon, R. A., & Hultsch, D. F. (1989). Evidence for the convergent validity of two self-report metamemory questionnaires. *Developmental Psychology, 25*, 687-700.
- Hertzog, C., Dixon, R. A., & Hultsch, D. F. (1990). Relationships between metamemory, memory predictions, and memory task performance in adults. *Psychology and Aging, 5*, 215-227.
- 一川 誠 (2019). ヒューマンエラーの心理学 筑摩書房
- 井上 毅 (2002). ヒューマンエラーとアクションスリップ 井上 毅・佐藤浩一 (編著) 日常認知の心理学 (pp.36-50) 北大路書房
- 海保博之 (1999). 人はなぜ誤るのか 福村出版
- 金城 光・井出 訓・石原 治 (2013). 日本版成人メタ記憶尺度 (日本版 MIA) の構造と短縮版の開発 認知心理学研究, *11*, 31-41.
- Reason, J. (1984). Absentmindedness and cognitive control. In J. E. Harris & E. Morris (Eds.), *Everyday memory, actions and absent-mindedness* (pp.113-132). London: Academic Press.
- Reason, J. (1990). *Human error*. New York: Cambridge University.
- 清水寛之 (2018). 日常生活場面における認知的失敗行動の自己評価と時間的展望－認知的失敗質問紙 (CFQ) とジンバルド時間的展望尺度 (ZTPI) の関係－ 神戸学院大学心理学研究, *1*, 33-41.
- 清水寛之・高橋雅延・齊藤 智 (2006). 日常記憶に関する自己評価の分析－メタ記憶質問紙による検討－心理学研究, *77*, 366-371.
- 清水寛之・高橋雅延・齊藤 智 (2007). メタ記憶質問紙を用いた日常記憶に関する自己評価－日常記憶質問紙, 認知的失敗質問紙, 及び記憶能力質問紙の標準データと因子構造－ 人文学部紀要 (神戸学院大学人文学部), *27*, 143-166.
- 潮見佳男 (1995). 民事過失の帰責構造 信山社出版
- Valentijn, S. A. M., Hill, R. D., Van Hooren, S. A. H., Bosma, H., Van Boxtel, M. P. J., Jolles, J., & Ponds, R. W. H. M. (2006). Memory self-efficacy predicts memory performance: Results from a 6-year follow-up study. *Psychology and Aging, 21*, 165-172.
- Wallace, J. C., Kass, S. J., & Stanny, C. J. (2002). The Cognitive Failures Questionnaire revisited: Dimensions and correlates. *Journal of General Psychology, 129*, 238-256.
- Weiner, B. (1979). A theory of motivation for some classroom experiences. *Journal of Educational Psychology, 71*, 3-25.
- 山田尚子 (1999). 失敗傾向質問紙の作成及び信頼性・妥当性の検討 教育心理学研究, *47*, 501-510.

—2019.10.9 受稿 2019.11.8 受理—